

## ヘンデル、ジョージ・フリデリック (フレデリック)

1685-1759

Handel [Händel, Hendel], George Frideric [Georg Friederich (Friedrich)]



### ドイツ出身であるが、後にイギリスに帰化した作曲家。

洗礼名はゲオルク・フリーデリヒ・ヘンデル Georg Friederich Händel であり、ドイツでは当時から現在もこのつづりが用いられている。ヘンデル自身は、イタリアでは Hendel とつづっており、イギリスでも最初はこのつづりを使用していたが、後には常にウムラウトなしで Handel と自署した。イギリスでは、一般にファースト・ネーム (George Frideric) を用いていた。

ヘンデルは、声楽・器楽いずれの分野でも常にバロック時代の大作曲家の一人として評価されてきた。しかし、英語圏の国々では、数曲のオラトリオが人気を得、それが宗教音楽さらには教会音楽とさえ考えられたことによって、彼の天才の本質やその大きさが長い間覆い隠されていた。

彼は、ドイツ、イタリア、フランス、そしてイギリスの伝統を公平に取り入れた点でコスモポリタンであり、折衷派の芸術家であり、また、広い意味でのヒューマニストであり、その修業や性分からは主として劇場作曲家であった。 (ニューグローヴ世界音楽大事典)

# I. ヘンデルの生涯

(「ヘンデル / 三澤寿喜著」に基づき作成)

## ハレ時代 (1685-1703)

1685年 ザーレ川のほとり、[ドイツの]ハレの町で生れた。

## ハンブルク時代 (1703-1706)

1703年(18歳) ハンブルク・オペラの第2ヴァイオリン奏者となり、翌年、チェンバロ奏者となる。

\*商業・文化の両面で重要な中心地であったハンブルクは、ドイツでは宮廷以外に常設のオペラ団体を持つ唯一の都市であった。

(ニューグローヴ世界音楽大事典)

## イタリア時代 (1706-1710)

1706年(21歳) 秋 イタリアへ向けて出発。フィレンツェに滞在後、年末にローマへ。

\*イタリアでの数年間はヘンデルの生涯に決定的な影響を与えた。イタリアは、オペラやオラトリオ、室内カンタータばかりでなく、最も重要な器楽形式であるコンチェルトとソナタの発祥の地でもあった。

(ニューグローヴ世界音楽大事典)



## ハノーファー時代 (1710)

25 歳 ハノーファー選帝侯宮廷楽長に任命される。

## ロンドン (1710-1759)

1711 年(26 歳) ロンドン最初のオペラ《リナルド》初演 (ヘイマーケット国王劇場)。

\* 十八世紀初めのロンドンの経済は大いなる発展期であった。

\* ロンドンの豊かな経済は演劇や音楽を初めとする活発な文化活動を支えており、ヘンデルが定住した 1710 年代のロンドンでは市民レベルの音楽シーンも豊かに彩られていた。

貴族たちの間にイタリア・オペラを求める機運が大きな高まりを見せ始めた。

→ ヘイマーケット国王劇場においてイタリア・オペラを恒常的に上演するための会社組織「ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージック」を設立。

1719 年(34 歳) 「ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージック」より「給与付きオーケストラ楽長」(音楽監督)に任命される。

1723 年(38 歳) 王室礼拝堂作曲家に任命される。

1727 年 2 月、42 歳の誕生日の直前に、イギリスに帰化。

1728 年 経営的に破綻し、「アカデミー」閉幕。

1729 年(44 歳) 「ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージック」再開。

第 2 期「アカデミー」においても音楽面の総責任者であった。

第 2 期「アカデミー」のオペラは第 1 期におけるような大成功をみることはなかった。

1733/34 年 コヴェントガーデン王立劇場に移った。

1740 年(55 歳) 《イメネーオ》、1741 年(56 歳) 《デイダミア》初演。(ヘンデルが自ら指揮したロンドンでの最後のオペラ上演)

ロンドンの聴衆はもはや、旧弊なイタリア・オペラには見向きもしなかった。

1741 年、ヘンデルは残りのシーズンを完全にオラトリオに切り換えて乗り切ろうとした。

《陽気の人、ふさぎの人、中庸の人》《エイシスとガラテア》《サウル》を再演。

しかし、聴衆の入りは思わしくなかった。

## オラトリオ 《メサイア》

1741年(56歳) 夏、ヘンデルは前シーズンの失敗の痛手から立ち直ることができず、次のシーズンはなにもする気力が湧かないほどに落ち込んでいた。

《メサイア》の台本をジェネズから受け取る。

アイルランド総督ウィリアム・カヴェンディッシュから、ダブリンでの演奏会開催の申し出があった。



ロンドンでの聴衆に希望をもてなくなっていたヘンデルはダブリンの新しい聴衆への期待、慈善目的であること、安定した収入の見込まれる予約演奏会であることなどから、この申し出を快諾する。



ヘンデルは《メサイア》の作曲に取り掛かると、9月14日までのおよそ三週間で一気にこの傑作オラトリオを完成させた。



1742年(57歳) 4月13日 初演 (ダブリン ニュー・ミュージック・ホール)  
初演は大成功であり、聴衆に深い感動を与えた。



1743年(58歳) 3月23日 ロンドン初演 (コヴェント・ガーデン王立劇場)

ロンドン初演に來臨したジョージ II 世が「ハレルヤ・コーラス」の部分で感動のあまり立ち上がり、聴衆もそれにならったことから、こんにちでもそこで全員が起立する習慣がある。

(最新名曲解説全集 声楽曲 I)

**1750年(65歳)** ヘンデルは新設された孤児養育院\* 礼拝堂における慈善演奏会として《メサイア》を上演し、その収益金を同養育院に寄付した。  
ヘンデルは死ぬ年まで、同養育院における《メサイア》の慈善演奏会を開催し、その収益を寄付し続けている。

\* 貴族の私生児などを収容する施設で、音楽教育が重要な役割を果たした。

初演が「フィルハーモニー協会」主催の慈善興行であり、またロンドンに帰ってからも、1750年以降、ヘンデルは毎年「孤児養育院(Founding Hospital 1739年創設)のためにこの作品を演奏したので、こんにちでもクリスマス・シーズンには、世界各地でこの曲の慈善演奏をおこなう習慣になっている。

(最新名曲解説全集 声楽曲 I)

**1759年(74歳)** シーズンの締め括りとして、3月30日、4月4日、4月6日《メサイア》を3回上演。4月6日の最後の演奏会から帰宅すると、そのまま病床に臥し、4月14日に息を引き取る。

## II. オラトリオ

### オラトリオ oratorio[英, 仏, 伊]Oratorium[独] とは

劇的、叙述的、省察的要素を具えた宗教的歌詞を持つ長大な楽曲。

オラトリオの音楽形式と様式は、その歴史の大半を通じて合唱に比重が置かれていることを除くと、いずれの時代においてもオペラに類似しているが、演奏方法はコンサート形式（舞台装置、衣装、演技を伴わない）をとるのが普通である。

オラトリオは 17～18 世紀に最も広範な発展を遂げたが、その後も重要なジャンルの一つであり続けた。  
(ニューグローヴ世界音楽大事典)

### ヘンデルのオラトリオ

ヘンデルの最大の業績は英語によるオラトリオであり、何よりも、これによってヘンデルの名は不滅のものとなっている。

英語によるオラトリオは、一つの新しい形式であり、ヨーロッパのいかなる形式ともほとんど関係しない、ヘンデル独自の創造物である。

この英語によるオラトリオは、劇場に執着していたヘンデルがある偶然から生み出したものである。すなわち、ロンドン主教が舞台上演に干渉したことと、イギリスの中産階級が叙事詩スタイルの親しみやすい聖書の物語を好んだことから、娯楽性に教化という要素を結びつけたことによる。

オラトリオの長所は最初から明確であったが、その発展はゆるやかであった。ヘンデルは背景や衣装に要する経費をなくし、また、後には費用のかかるヴィルトゥオーソ的歌手に頼ることもやめて、コーラスを活用することによって音楽的あるいは劇的な幅を広げ、構成の多様化に成功した。

彼が使ったコーラスは男声合唱で、高音域用の 6 人の少年も含めたおそらく 20 人たらずの少人数なものではあったが、いずれも王室礼拝堂やウェストミンスター・アビーに所属するプロの歌手であり、独唱者も彼らと一緒に歌うよう求められていた。

(ニューグローヴ世界音楽大事典)

### III. メサイア Messiah HWV 56

#### 〈メサイア〉とは

ヘブライ語「メシア---Māšiah」の英語読みで「救世主」のこと。

ギリシャ語の「クリストス(キリスト)」にあたる。

本来の意味は「油を注がれた者 the Anointed」だが、これはかつて聖職である王や祭司に任ぜられるとき、聖別されたしるしとして頭に香油をかける習慣があり、やがてそれがユダヤの民の救い主として考えられるようになったことから来ている。

(宗教音楽対訳集成)

#### ヘンデルの他のオラトリオと比べた〈メサイア〉の特徴

##### 〈他のオラトリオ〉

- ☆ 旧約聖書の英雄を主人公としている
- ☆ 主人公がみずから劇の進行を司る
- ☆ オペラ風の台本を用いている
- ☆ ロンドンで初演された

##### 〈メサイア〉

- ☆ キリスト自身が主人公となる
- ☆ キリストが曲中に登場しない
- ☆ 台本は聖書の抜粋を綴り合せたもの
- ☆ ダブリンの劇場で初演された

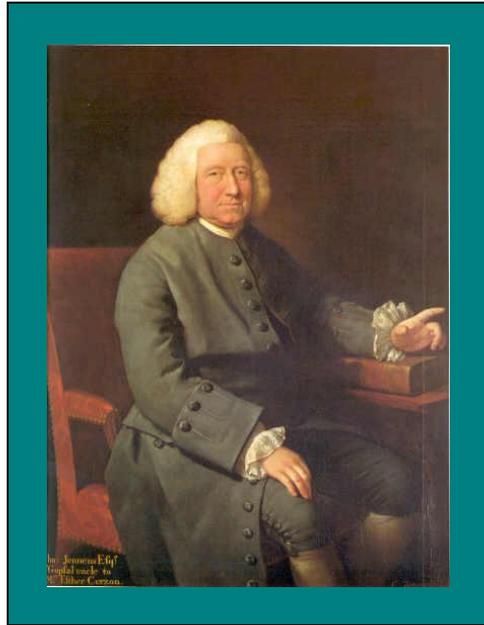
(Messiah /Handel CD解説より 磯山雅 CD92-313)

〈メサイア〉の最も偉大な点は、見方によっては、イタリア・オペラやイギリスのアンセム、ドイツ受難曲などの伝統のユニークな統合であり、また、英国国教会の信仰心を表現しようとするヘンデルの個人的信仰心と、他のどのような芸術作品も及ばない創造の才との結合である。

(ニューグローヴ世界音楽大事典)

## テキスト作者

ジェネンズ、チャールズ Jennens, Charles, 1700-1773



### イギリスの作家、台本作家。

レスターシャーのゴプソルの富裕な地主チャールズ・ジェネンズの、唯一長生きした息子で、1747年に親の跡を継いでいる。16年にオクスフォードのベイリオル・カレッジに入学したが、非国教徒であったためか卒業はしていない。

当時ジェネンズは、その財産と奇行と派手な生活で有名だったといわれるが、今日ではヘンデルの友人、およびその主要な4つのオラトリオ〈サウル Saul〉〈陽気な人、ふさぎの人、温和の人 L'Allegro, il Penseroso ed il Moderato〉〈メサイア〉〈ベルシャザル Belshazzar〉の台本作者としてのみ知られている。

ヘンデルは個人的にも仕事のうえでもジェネンズを尊重していたようである。実際、ヘンデルにとってそれだけ価値のある人物であった。冗長で退屈なものも時折見られるとはいえ、彼はヘンデルにとって最高のオラトリオ台本作者であった。聖書からの題材、古典からの題材、ミルトン風のもの問わず、構成を自在に操りながら、内実さを欠いた道徳性は持ち込もうとしなかったために、作曲するヘンデルの才能が十分に発揮されることとなった。

(ニューグローヴ世界音楽大事典)

## テキストと楽曲編成

ジェネンズの『メサイア』テキストは、すべて 1611 年版の『欽定訳聖書』(Authorized Version)テキストと『グレート・バイブル』(Great Bible 1539) の中の詩編テキストから引用・編集されたものである。

厳密に言えば、編集にあたっては、聖書テキストにおいてキリストが一人称である場合、『メサイア』テキストでは、その構成上三人称に書き替えられている。このことを除けば、台本は聖書テキストに完全に依拠している。

聖書テキストの引用範囲は、旧約聖書では預言書と詩編に集中しており、新約聖書ではマタイ、ルカ、ヨハネの各福音書とパウロの手紙からさらにヨハネ黙示録に及んでいる。テキストの引用は、旧約聖書から 25 か所、新約聖書から 16 か所である。



聖書各テキストから引用されて出来上がった『メサイア』のテキスト全体は、聖書の権威によって疑いもなく普遍的なキリスト教信仰を表明しており、また同時にキリスト教教義や思想の全体像を明示するものとなっている。



ヘンデルは、この優れたテキストの音楽化における楽曲形式として、レチタティーヴォ(recitativo 叙唱)、レチタティーヴォ・アコンパニャート(recitativo accompagnato 伴奏付叙唱)、アリア(aria 独唱曲)、コーラス(chorus 合唱楽曲)と器楽伴奏、そして、純粹なオーケストラ部分を用いている。



これら諸楽曲の小さな組み合わせと全体の構成とによって『メサイア』全体の音楽の構造ができる。

(メサイア テキストと音楽の研究)

## メサイアの版

17年間 [1741-1759]にもわたって数多く\*1上演されてきた《メサイア》が、その間幾度かにわたって作曲上の改訂にさらされたのは何も不思議なことではない。それらのいくつかは、美的観点からの書き直しを示すものであるかもしれないが、やはり多くは歌手の配役変更によるものであったと思われる。

\*1 ロンドン以外のイギリスにおける演奏を加えると、ヘンデルの生存中、実に 69 回の演奏が確認されるという。

ヘンデルによる《メサイア》の上演は合計 36 回にも及んだ。

1741 年のオリジナル・スコアは、まず 1742 年のダブリン公演を前に改訂され、さらに翌 1743 年にはロンドン初演のために再び手が加えられた。

1745 年ロンドン再演のためにヘンデルは、今では《メサイア》の中でも最もよく知られている 2 つの楽章、第 39 曲：<その声は全地にひびきわたり>  
Their sound is gone out into all lands のコーラスと、第 18 曲：<シオンの娘よ、大いに喜べ> Rejoice greatly の 4 分の 4 拍子版を新たに作曲している。

このうちコーラスは、《メサイア》における初めてのオーボエ・パートを含んでいる。オーボエはもともとオリジナル・スコアには記されておらず、ダブリンでの演奏でも用いられなかった可能性があるが、おそらくその後のすべてのロンドン公演でのオーケストラには加えられていたものと思われる。

我々は、ヘンデルがその遺言で孤児養育院のために残した一組の演奏会用パート譜から、オーボエがどのような形でこの作品に加えられ、用いられたのかを知ることができる。



「孤児養育院版」はスコア、パート譜、演奏者の一覧が現存し、それに基づく再現が可能である。指示された編成と演奏者数は、ヴァイオリン 14、ヴィオラ 6、チェロ 3、コントラバス 2、オーボエ 4、ファゴット 4、トランペット 2、ホルン 2、ティンパニ、通奏低音(オルガン、チェンバロ)、5 人の独唱者(ソプラノ 2、コントラルト、テノール、バス)、合唱(ボーイソプラノ 4~6、男声 13)。

(「オラトリオ《メサイア》：全曲」DVD 解説 矢澤孝樹 DV01-038)

さらにこの後のスコアの大きな修正としては、**1750年**、ヘンデルは彼の楽団の新しいカストラートのアルト歌手、**ガイタノ・グァダーニ** (Gaetano Guadagni) のために、第6曲：<その来る日には、だれが耐え得よう> But who may abide the day of his coming と、第36曲：<あなたはとりこを率い、高い山に登られた> Thou art gone up on high のふたつに新しい曲を書いている。

**1750年以降**は《メサイア》の音楽的内容は事実上固定され、自然に補強されてゆく傾向にあったようであるが、これはヘンデルの視力の低下が進むにつれて、それ以上の創作的献身が困難となったためである。

にもかかわらず、独唱歌手の配役は年と共に移り変わり、そのたびにスコアは楽章の配置を変えたり、時には移調する事などによって、その時々々の要求に見合うよう、改作、適合されていったのであった。

(「メサイア : HWV56」 CD解説 ドナルド・バロウズ CD01-631)

♪ 版の相違に関する一覧は次の資料で見ることができる。

- ・ 楽曲総覧・年代別改変一覧 (ヘンデル: メサイア D94-074 別冊)
- ・ 「メサイア」:年代別・楽譜別に見た構成上の差異要点  
(演奏者・鑑賞者のための「メサイア」ハンドブック資料① WS02-042)
- ・ Ten alternative versions of Messiah  
(George Frideric Handel Messiah. Peters. B06-405)

## IV.モーツァルト ヘンデル「メサイア」の編曲 K. 572

編曲年代：1789年初期

編曲地：ウィーン

初演：1789年3月6日 ヨーハン・エステルハージ伯爵宮廷

テキスト：ヴァン・ズヴィーテン男爵によるドイツ語（チャールズ・ジェネズの英語をクリストフ・ダニエル・エーベリングがクロップシュトックの「メシアス」に依拠しながら作成したドイツ語に基づく）

構成：序曲と第1部（預言）、第2部（受難）、第3部（復活）からなる

使用楽譜：1767年にランダル＝アーベルがロンドンで出版した初版

モーツァルト（ヴォルフガング・アマデーウス, Mozart, Wolfgang Amadeus, 1756-1791）による「メサイア」の編曲は、ヴァン・ズヴィーテン男爵\*1の主導による伝統音楽の再評価の機運の中で行われたものであるが、彼に課せられた役割は、**この作品をいかに当時のウィーンの音楽状況に合わせて置き換えるかということであった。**

それは例えば、合唱のトゥッティにトロンボーンを重複するといった手法に見られる。このようなトロンボーンの使い方は、当時のウィーンにおける教会音楽に一般的に見られた手法にほかならないのである。

\*1 ゴットフリート・ヴァン・ズヴィーテン男爵 1733年にオランダのライデン生まれ、1803年ウィーンで没した人物。モーツァルトはもちろん、ハイドンやベートーヴェンとも深い関係を持ち、当時のウィーンの音楽界に重要な影響力を行使した人。

モーツァルトが「メサイア」の中のいくつかの曲をカットしたり作り換えたことも、彼の時代の要求であった。合唱「Lasst alle Engel des Herrnpreisen ihn」や、アリア「Du fuhrest in die Hoeh」のすべて、またアリア「喇叭(らっぱ)が鳴りひびいて」の中間部を省略したり、アリア「神が私たちの味方であるなら」を伴奏付レチタティーヴォに作り換えたのは、ヘンデルにおける並列的・モザイク的な劇的進行を発展的・継続的なものに、いささかなりとも変えようとするためであった。

声種の変更にもある種の意図とが認められる。

ヘンデルのアリア「だが、そのきたる日にだれが耐えようか」はアルトではなく、バスによって歌われるが、この変更は第1部における女声の登場を遅らせ、キリストの誕生の告知を女声の高音に担わせる効果をもたらす。

もっとも、ヘンデルも初演当初はこのアリアをバスに歌わせていたのだが、彼はその後このアリアをもっぱらアルトやカストラート、ソプラノに歌わせていた。

楽器編成の変更も大きな意味を持つ。

ヘンデルのオーケストラは概して内声部に間隙があり、それは和音楽器であるオルガンやチェンバロで充填されていた。

[中略]

モーツァルトにおいては、かつての和音楽器による充填は、今や管楽器によって行われることになった。そればかりでなく、フルートや、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルンといった楽器は、固有の音色と固有の詩的な意味を担うことになる。

(モーツァルト全集[CD]. 別巻 解説 CD17-301～CD17-304)

ヨーハン・エステルハージ伯爵宮廷  
1789年3月6日 モーツァルト、  
ヘンデル「メサイア」の編曲を初演



## V. 各曲のタイトル

\* 英語のタイトルは”G.F. Handel: Messiah. Oxford University Press”による

\* 日本語のタイトルは「宗教音楽対訳集成」による

### Part the First

### 第 1 部

救世主の預言、イエスの降誕、よき羊飼いたち

- |   |                               |
|---|-------------------------------|
| 1. Sinfony  | 1. シンフォニー                     |
| 2. Comfort ye (Accompagnato: Tenor)   | 2. 「慰めよ、わが民を慰めよ」と             |
| 3. Ev'ry valley (Song: Tenor)   | 3. あらゆる谷は高くあげられ               |
| 4. And the glory of the Lord (Chorus)   | 4. こうして 主の栄光があきらかになり          |
| 5. Thus saith the Lord<br>(Accompagnato: Bass)  | 5. 主は、万軍の主は こう言われる            |
| 6. But who may abide<br>(a). (Song: Alto)<br>(b). (Song: Bass)<br>(c). (Recit.: Bass)<br>(d). (Song: Soprano・G minor)<br>(e). (Song: Soprano・A minor) | 6. だが だれがとどまれよう               |
| 7. And He shall purify (Chorus)   | 7. その方はレビの子らを(鍛錬して)清める        |
| 8. Behold, a virgin shall conceive<br>(Recit.: Alto)  | 8. 見よ、処女 <sup>おとめ</sup> が身ごもり |
| 9. O thou that tellest<br>(Song: Alto, & Chorus)  | 9. よい知らせをシオンに伝える者よ            |
| 10. For behold, darkness<br>(Accompagnato: Bass)  | 10. 見よ、闇が地をおおい                |
| 11. The people that walked in darkness<br>(Song: Bass)  | 11. 闇のなかを歩む民は                 |
| 12. For unto us a child is born<br>(Chorus)   | 12. ひとりのおきな子がわれらに生まれた         |
| 13. Pifa  | 13. ピファ                       |
| 14(a). There were shepherds<br>(Recit.: Soprano)  | 14(a). 野原で 羊飼いたちが野宿をしながら      |
| 14(b). And lo, the angel of the Lord<br>(Accompagnato: Soprano)   | 14(b). すると おお                 |
| 14(c). But lo, the angel of the Lord<br>(Arioso: Soprano)   |                               |

15. And the angel said unto them  
(Recit.: Soprano)
16. And suddenly there was with the angel  
(Accompagnato: Soprano)
17. Glory to God (Chorus)
18. Rejoice greatly  
(a). (Song: Soprano • Final Version)  
(b). (Song: Soprano • First Version)  
(c). (Song: Soprano • Second Version)
19. Then shall the eyes of the blind  
(a). (Recit.: Alto)  
(b). (Recit.: Soprano)
20. He shall feed his flock  
(a). (Song: Alto)  
(b). (Song: Soprano)  
(c). (Duet: Alto & Soprano)
21. His yoke is easy (Chorus)

15. すると その天使は言った
16. すると とつぜん この天使に
17. いと高きところには、神に栄光あれ
18. おおいに喜べ
19. そのとき 見えぬ者の目は開き
20. その方は 羊飼いのように群れを養い
21. その方のくびき輓は負いやすく

Part the Second

第2部

受難、最後の審判、救いの成就

22. Behold the Lamb of God (Chorus)
23. He was despised (Song: Alto)
24. Surely He hath borne our griefs  
(Chorus)
25. And with His stripes (Chorus)
26. All we, like sheep (Chorus)
27. All they that see Him  
(Accompagnato: Tenor)
28. He trusted in God (Chorus)
29. Thy rebuke hath broken His heart  
(Accompagnato: Tenor or Soprano)

22. 見よ、神の小羊
23. その方はさげす蔑まれ 人びとに拒まれた
24. たしかに その方はわれらの苦しみをにな担い
25. その方の傷によって われらはいや癒されたのだ
26. われらはみな 羊のようにちりぢりになり
27. その方を見る者はみな あざ笑う
28. あの男は神を信じていた
29. あなたのあざけりに心を打ちくだ砕かれて

30. Behold and see (Song: Tenor or Soprano)	30. 目を留めよ、そして見よ
31. He was cut off (Accompagnato: Tenor or Soprano)	31. その方は生者の地から断たれた
32. But Thou didst not leave (Song: Tenor or Soprano)	32. だが あなたはその方の魂を
33. Lift up your heads (Chorus)	33. <sup>こらへ</sup> 頭を上げよ [開け]、門たちよ
34. Unto which of the angels (Recit.: Tenor)	34. いったい かつて天使のだれに
35. Let all the angels (Chorus)	35. 神の天使はみな その方を礼拝せよ
36. Thou art gone up on high (a). (Song: Alto) (b). (Song: Bass) (c). (Song: Soprano・D minor) (d). (Song: Soprano・G minor)	36. あなたは高みに上げられた
37. The Lord gave the word (Chorus)	37. 主が御 <sup>み</sup> ことばをくださった
38. How beautiful are the feet (a)/(b). (Song: Soprano) (c). (Duet: 2 Altos, & Chorus) (d). (Duet: Soprano, Alto, & Chorus) (e). (Song: Alto)	38. なんと美しいことか
39. Their sound is gone out (a). (Chorus) (b). (Song: Tenor or Soprano)	39. かれらの声は全地に響きわたり
40 (a)/(b). Why do the nations (Song: Bass)	40. なぜ 国ぐには
41. Let us break their bonds (Chorus)	41. かれらの <sup>かせ</sup> 枷を打ちこわそう
42. He that dwelleth in heaven (Recit.: Tenor)	42. 天に住む方は
43. Thou shalt break them (a). (Song: Tenor) (b). (Recit.: Tenor)	43. おまえは鉄の <sup>つえ</sup> 杖でかれらを打つ
44. Hallelujah (Chorus)	44. ハレルヤ [神をたたえよ]

Part the Third

第3部

イエスの復活、死者の復活、永遠の命

45. I know that my Redeemer liveth  
(Song: Soprano)
46. Since by man came death (Chorus)
47. Behold, I tell you a mystery  
(Accompagnato: Bass)
48. The trumpet shall sound (Song: Bass)
49. Then shall be brought to pass  
(Recit.: Alto)
50. O death, where is thy sting?  
(a). (Duet: Alto & Tenor •  
Revised Setting)  
(b). (Duet: Alto & Tenor • First Setting)
51. But thanks be to God (Chorus)
52. If God be for us  
(a). (Song: Soprano)  
(b). (Song: Alto)
53. Worthy is the Lamb (Chorus)
54. Amen (Chorus)

45. 知っている、私を贖う方は生きておられ
46. 死が ひとりの人によってなされたの  
だから
47. 見よ、あなたがたに神秘を告げよう
48. そのラッパが鳴ると
49. そのとき(聖書に)書かれた
50. 死よ、おまえの刺はどこにある？
51. ともあれ 神に感謝しよう
52. 神がわれらの味方なら
53. かの小羊こそ ふさわしい --屠られ
54. アーメン [そうありますように]

## VI. 楽譜

### Part the First “Sinfony” シンフォニー

※配付資料には以下の譜例を掲載しています。

- ・ 自筆譜ファクシミレ
- ・ 新全集
- ・ Oxford 版 (Clifford Bartlett 編. C1998)
- ・ モーツァルトによる編曲

### Part the Second “Hallelujah” ハレルヤ

※配付資料には以下の譜例を掲載しています。

- ・ 自筆譜ファクシミレ
- ・ 新全集
- ・ Oxford 版 (Clifford Bartlett 編. C1998)
- ・ モーツァルトによる編曲

#### OPACによる検索

キーワード欄に ヘンデル メサイア と入力してください。

↓

作品名から Messiah, HWV 56 = メサイア を選択します。

この所蔵リストで興味のある資料が見つかった場合には、  
詳細検索画面の、請求記号欄に

半角英数で請求記号 (例：CD00-265 など) を入力

して下さい。